

おれたちの村

⑥

蒲原ユミ子

陽平はぐだぐだ言う守にいらいらしたが、いつものことなのでがまんしてせつとくした。

「青大将なんてどこにもうじやうじやいるし、べつに殺すわけではな
いよ。山の通り道にいるから、ちよ
つとこらしめてやるだけさ。蛇がい
なくなったら桜田先生もよろこぶ
と思うよ」

守はようやくうなずいた。

「しようがないなあ」

実は、守も桜田先生に気に入られ
たいのだ。

のどやかで平和なあぜ道を、わっ
しわっしといかめしく進んでいる
のが陽平。後ろにヒロキ、ちよつと
間をおいて守がへっぴりごしでつ
いていく。用意した物は、大人の握
りこぶし大の石と長めの棒。石はポ
ケットに5・6こもつめてあるから
重たいほどである。

クルミの大木に着いた。めあての
青大将はいない。守はほつとした。
しかし、陽平はやぶに入っさか
し始めた。ヒロキもべつな方向に入っ
ていく。

しばらくして、ヒロキがさげんだ。

「いたぞっ！」

陽平がすつとんでいく。守もつら
れて近よる。岩かげに蛇がくねつと
胴体を曲げ、(うるさいなあ)とい
う顔で頭をもたげている。陽平はち
よつと戦意をなくして言った。

「ちよつと小さいな。あいつではな
いよ」

ヒロキは自分で見つけたので、す
つかりこうふんしている。

「こいつをやつつけようぜ。こいつ
もすぐ大きくなるし」

その理屈に、陽平はすぐその気に
なった。

「よし、やるか」

えものをねらう2人のらんらん
とした目。蛇はこまったように葉陰

に向いた。すかさず、陽平の石がそ
の頭をねらった。頭に命中！ 傷つ
いた蛇は必死ににげていく。ヒロキ
の石も飛ぶ。陽平も続けざま石をと
ばす。ヒロキも負けてはいない。蛇
にはいいいわくだ。守がさげんだ。

「もうやめな。のろわれるよ！」

勢いづいていた2人は石がなくな
つてのでやめた。

ぐったりしている蛇を棒でおさ
え、陽平は2人に聞いた。

「こいつをどうしようか」

守はこんな気持ちの悪いものは
放つて家に帰りたいくらいなので、

だまつていた。陽平はあることを思
いつきにやりと笑った。

「こいつをあいつに見せてやろう
ぜ」

ヒロキは、(あいつつてだれ?)
という顔をした。陽平は早口で言っ
た。

「泉だよ」

ヒロキは(泉くんはどうして?)

というふう。ヒロキは休み時間にけ
つこう泉と遊んでいるのだ。陽平は
やや言い訳がましく言った。

「あいつはとかい育ちだからな、こ
ういうのにもなれていた方がいい
んだよ」

ヒロキはべつに反対するとい
うわけでもなく、「ふうん」と言った。

陽平は傷だらけの蛇を自分の棒
にからませて持ち上げた。蛇は白い
蛇腹を見せぐんなりしている。それ
は、けして見よいものではなく、守
は目をそらせた。

夕方、と言つてもまだまだ明るい。
あと少しで夏至になるので、5時半
が過ぎても昼と変わらないくらい
明るい。

校舎の角で3人は息をひそめて
待っている。陽平の持つ棒にはエモ
ノの蛇がぐんなりからまつている。
校舎の前は通路になつていて、学
童帰りの泉が妹の手を引いてやっ

て来るところだ。泉が近づいたら、目の前に蛇をにゆうっとさし出しておどろかそうというわけだ。かわい妹妹も巻きぞえにしてしまうが、陽平によると、「いなかぐらしをしているのだから、へびになれておいた方がいい」そうである。

足音の気配をさっし、陽平はエモノをにゆうっとつき出した。

ギヤアッ！

ものすごい悲鳴をあげ、通路を無視し、ばたばたと校庭のまん中をつつ切つてにげていったのは、桜田先生だった。いつのまに、桜田先生がやってきたのだろう。近くに職員玄関はあるけれど。

あとからやって来た泉は、なりふりかまわずすつ飛んでいった桜田先生を見てびつくりするでもなかった。そして、(しまった!)という顔している陽平たちに声をかけるでもなく通り過ぎた。

7 山行き

タッタタッタ

ムサシが走る。並んで陽平も走る。

ここは人気も車も少ない山沿い

の曲がりくねった道。めざすは母ちゃんが働いている旅館である。べつに用はないのだけれど、お屋敷のじいさまにムサシと外を散歩するのを許されてもう10日なので、きょうは休みでもあるし、ちよつと遠出をしてみようと思っただけだ。

歩くと40分くらいかかるけれど、ずつと走ってきたので、もう温泉街が見えてきた。さすがに、陽平の息が切れてきた。しかし、横を走っているムサシは平気である。陽平は母ちゃんのいる旅館まではがんばろうと思った。

ムサシの筋肉はりゆうりゆうとしていて見ると元気がわいてくる。そして、ムサシは1日ごとにかくましくなっていくような気がする。

あつ、見えてきた。『湯本旅館』と、白地に青の太い文字が横に書かれた年季の入った看板だ。

湯本旅館は道路から石段を3段上がってすぐ玄関になっているので、中がよく見える。母ちゃんの姿は見あたらない。陽平は立ち止まってハアハアした呼吸を整えるとムサシを見た。

「よし、行くぜ」

陽平は仕事中の母ちゃんを呼び出すつもりはない。そんなことをしたら母ちゃんに叱られてしまう。温泉街を一周しようと思きかけたとき、

「陽平じゃあないか」

と呼びとめられた。ふり向くと、箒を持った母ちゃんである。旅館の路地の勝手口から出てきたらしい。陽平はちよつと照れ笑いをした。そして、ムサシに、もう一度、「行くぞ」と言った。

ウワン。ムサシは軽く返事をして走りかけた。

「お待ち！」

母ちゃんが小さく呼びとめた。着物のたもとをまさぐり、小袋を差し出した。

「人のいないところで食べるのだよ」

母ちゃんは陽平が小袋を受け取るなり、もう他人の顔して通りの落ち葉を掃き始めた。陽平もさつさと遠ざかった。

母ちゃんが働いている旅館さえ見れば気がすんだのに、おやつまでもらえた！ 陽平の足は元氣よくはずんできた。

温泉街を一周して帰ろうと思つていたのに、陽平の気が変わった。(よし、あそこだ)

温泉街のはずれから陽平は山道に入った。細くて草や枝が左右から伸びているけれど、しつかりふみかためられた道である。ムサシはおとなしく陽平のあとをついてくる。もう陽平はムサシの散歩用のひもをはずしてやったけれど、ムサシは散歩のご主人である陽平の前には出ない。

山道を登り下りししてから急な坂を登りきった。

と、とつぜん美しい湖が広がっていた。陽平は顔中汗をしたたせながらほうつと息をついた。ここに来ると、なぜか安心する。水の側にいると、とても落ち着く。

しんと静まり返った山々、湖面に真夏の濃い緑が映っている。

ムサシはハッハッハッと赤い舌を出しながら息を整えている。

「よし、ひみつの基地を教えるからな」(つづく)

父不^{おや}知^{しり}

蒲原直樹

混沌市には子どもが多い。それを預かる保育所は不足しており、働く母親たちは困りはてている。そこに現れるのは無認可保育所だ。地域で知り合った母親たちが共同で立ち上げ、交代で保育をつとめる共同保育所も多い。混沌市宵闇町の「野うさぎ園」もそんな保育所の一つだ。そういう所はどこでも問題が多いが、「野うさぎ園」にもやっぱり問題があった。

終業の時間になり、母親たちがぼつぼつ子どもを引き取りに来始めると、藤田景子はようやくホッとした。

「さようなら」
「またあしたね」

順々に連れられていく子どもたちを見送りながらちらちらと保育室を見ると、自分の息子のほかにお決まりの二人が残っていた。景子は眉をひそめる。ともに三歳未満の男の子と女の子で、実は困った事情があった。景子が腕組みをし

ていると、やがて表に真つ黒い四輪駆動車が停まった。

「……」

車からぬつと大男が現れた。大ぶりの皮ジャンをはおり、サングラスをかけたボサボサの髪は汚れたバンドナで巻いてある。男は黙って景子に一礼すると、汚れたバスケットシューズを脱いで保育室に上がり、女の子を抱きかかえた。その足下に男の子がよたよたと走り寄った。

「パパー、パパー」

男はサングラスの下の顔を歪めると、男の子をかなり強い力で蹴飛ばした。大男のキックで子どもは一回転し、床に叩きつけられた。

「霧比等さん、なにするんです！」

景子が駆け寄ると男の子が泣き出すのが同時だった。男はそれには応えず、女の子を抱いたまま黙って靴を履き、車に乗り込んだ。おびえる二人の子どもに心配ない、という笑顔を向けながら、景子が泣き叫ぶ男の子を抱き起こしてい

るうちに車は轟音をたてて走り去った。窓の外に映った車の助手席には、細面の女の顔があったように見えた。

「ほんとに、ひどいよねえ……よその娘を迎えに来て、自分の子どもをけつとばすなんて」

三〇分遅刻して娘を引き取りに来た男の子の母親に、景子はそうつぶやいてみたのだが、彼女はほとんど無表情だった。

「……おさわがせしました。いいんですよ藤田さん、そんなに心配しなくても」

霧比等悠子はまだ二十歳をいくつも越えていない若い母親だ。おりしも降りだした雨の中を、これから重い息子を抱えて徒歩で帰宅しようとする。

「ちよつと待つてね、わたしも帰るから、送つてあげる」

景子は裏庭から軽の黄色いキャロルを出し、息子と霧比等母子を乗せて混沌中央病院通りを駆へ向けて走り出した。「それで、お義母さんはなんて言ってる

の」

「……」

霧比等悠子は中央病院の看護助手として働いている。義母の霧比等真理はペテランの看護師長だった。職場での力関係の違いは家庭でも大きい。きつと悠子は義母になにも言えないに違いない。

「霧比等さんの車にね、俱多良美香さんも乗っていたの。平然としているのね……わたし、本当に信じられない」

「お義母さんは『あの子はああいう病気だから、しばらく辛抱していれば治る』つて言うんです。あたしもそう信じています。……あの人、最近はお金も持ち出さないし、毎晩夜には必ず帰ってくるんです。心配かけるけど、藤田さんもお願いだから、しばらく見守つてやつてください」

「……」

悠子の夫、霧比等猛は自称カメラマンだが素人の域を出ていない。去年の春に交通事故を起こし、両目に傷を受けてフアインダーもろくに見ることが出来な

くなり、それから自暴自棄になつたらしい。障害者授産施設の印刷工房に入入りにしているが臨時のアルバイトでしかない、それにも今はほとんど出社してない。愛人でこれも看護師である俱多良美香の身の回りの世話をして小遣いを稼いでいるという噂だった。

「じゃあ、なにかあつたらすぐ電話してね」

大通りの裏の小さなマンシヨンの前にキヤロルを停め、霧比等母子を降ろしてから景子は職場に近い自宅へ戻った。

「ねえ、どう思う？」

藤田景子は久しぶりに家にいる夫に世間話をする形で愚痴をこぼした。土曜日のこの日は夫の休日で、景子も「野うさぎ園」の勤務を外れる日だったので、久しぶりに家族三人で一日を過ごし、夕食を終えたところだった。

「どうって言われてもねえ……」

都内の中堅出版社に勤務する夫は、校正係という職務もあつて沈着冷静な男だった。

(5) 「その夫婦はもうダメだと思つよ。でもその妻のほうはダメだと思つていないんだらう？……どうしようもないじゃないか。他人がどう言つたつて、こればっかりは本人が気づかなきゃどう

にもならないよ」

「そうなんだけど……」

景子のため息をついた。

「園のお母さんたちの中に猛さんの同級生がいてね、話を聞いたのよ。これがまったくひどい話なの」

霧比等猛の母親は一度も結婚したことがなかった。周囲の人間も誰も猛の父親を知らなかった。猛は父親を知らずに育つた。そのせいなのかどうか、我がままいっぱいの子どもになった。今もマンシヨンの家賃と車のローンは母親が払っているという。

「高校生のころから女たらしになつてね、しよつちゆう女の子を妊娠させてたんだつて。それを母親が医者连接到行つて堕ろさせていたんだつてよ。親にばれたときは慰謝料まで払つてたんだつて。看護師としては立派な人らしいけど、親としては失格ね」

「うーん……ひとのことは言えないけど」

夫はそれほどの感慨もなさそうに応えた。

「世の中には父親を兼ねられる母親もいれば、できない母親もいる。それでダメになる子どももいるし、それで逆につきり育つ子どももいる。その子んちは父親がいなくてダメになるタイプだつ

たんだらうね」

そこまで言つたときに電話が鳴つた。

夫はキッチンまで行つてコードレス受話器を取り、戻つてきて「君にだ」と言つて景子に手渡した。

黄色いキヤロルをとばして霧比等一家のマンシヨンに行き、景子が部屋に飛び込むと中は無残な有様だった。立っているものはすべて倒れ、ガラスのものはみんな割れ、ありとあらゆる物が散乱していた。蛍光灯も割れていたので室内は暗く、床に倒れているのが悠子だと分かるまで時間がかかった。景子はかろうじて残っていた蛍光スタンドを点け、悠子にヒビの入つたコップで水を飲ませた。

悠子は腫れあがつたまぶたを開けられず、口もきけないままに隣りの和室を指差した。景子はスタンドの光りを和室に向け、そこに入った。倒れた筆筒やペーパーベッドの下には何もなかったが、押入れの扉が開いていてその奥に毛布にくるまれた男の子が押し込まれていた。子どもは虫の息だった。景子はリビングに戻つて救急車を呼んだ。

ストレッチャーに乗せられた悠子が救急車に押し込まれようとした時、何か言つた。

「なに？……よく聞こえない」

「タケシを……助けて」

その声が終わらないうちにストレッチャーは救急車の荷台に押し込まれた。景子は車に戻り、猛の行きそうな所に行つてみる事にして、最初に俱多良美香の家に向かった。しかし園道を曲がつて走り出したとたんに、猛の四輪駆動車が道の端にひしゃげているのを見つけた。こちらははまだ救急車は来ていなかった。しかし景子は流れ出た血の量を見て、(連絡を急ぐ必要はない)と思つた。

霧比等猛の葬儀は翌週の月曜日に行われ、意外に参列者が多かった。俱多良美香を始め、昔つきあいのあつた女性が多く参列したようだった。

悠子は喪主として挨拶したが、まだ口がよく開かず言葉がはつきりしなかつた。彼女の横には三歳の長男が小さな車椅子に乗っていた。景子はその子を見ながら、

(ああ、また、父親を知らない子どもが出来た)

と思つた。

業とか宿命という古い言葉がある。こんな時にこそそれは当てはまるのかもしれない。人間にはそれを断ち切るほどの知恵もないのだろうか、景子はそう考へて空しい気持ちになるのだった。

白馬岳 (二)

中井 豊

二度目は、家族五人で登った。確か長女が高校一年生だったから、一九九〇年の夏休み——次女が中学校一年生、三女が小学校四年生の時だった筈である。

この時は、猿倉—大雪深—白馬岳頂上—裏旭岳—清水(しようず)岳—祖母谷(はばだに)温泉というルートにした。白馬岳登山と祖母谷温泉と黒部峡谷鉄道のトロッコ電車を乗しもうという、欲張った三泊四日の山行だった。初日は村営白馬尻荘に泊まった。

天気はずっと快晴だった。大雪深で近寄ってはならないクレバスを覗き込んでいて注意された。雪渓を抜けると、高山植物が咲き乱れていて美しかった。先に小屋まで登り、上から見てみると、二五〇〇mを過ぎたあたりで、よそのオバさんが三女のザックを持ってくれるのが目に入った。二日目は村営頂上宿舎に泊まった。

三日目、早朝に起きて旭岳の南側を巻いて、裏旭岳から清水岳へ。清水岳から祖母谷温泉までの延々と続く下りでは、疲れた長女が泣き声を上げた。次女と駆けるように先を歩くうち、私の膝が痛くなってきた。最後は一步一歩がつかなくなった。祖母谷温泉に着き、軽装になつて

黒部川の河原に出ると、熱い温泉が湧いており、冷たい川の水を引き込んで混ぜながら浸かる。「熱い!」「冷たい!」と言いながら楽しんだ。

最後の日は祖母谷温泉から樺平まで歩き、猿飛峽を見て、トロッコ電車に乗ったが、子供達は直ぐに眠ってしまった。家族全員での登山は、この時だけである。

三度目は、再び高校山岳部の顧問として生徒を引率して登った。ルートは、猿倉—大雪深—白馬岳頂上—天狗平—不帰険—唐松岳—八方尾根。最後はリフトとゴンドラを乗り継いで下りた。初日はやはり白馬尻でテントを張った。

二日目は大雪深から、白馬岳、杓子岳(二八二二m)、白馬鍾ヶ岳(二九〇三・一四)——これらは白馬三山といわれている——の各頂上を経て、天狗平まで歩いた。女生徒も三人いたのに、よく行けたものだ。

三日目は霧雨の中を出発した。「天狗の大下り」にかかる前に風も強くなってきたので、テント場へ引返して停滞することにした。午後から次第に気温が下がり、夕刻には雨が上がり、皆でプロックン現象を体験した。

四日目は八月三日だったと記憶しているが、朝になると、テント場横の池の表面に一夜のうちに氷が張っていた。下山して、白馬村国民保養センターの温泉に初めて入った。洒落た身なりの若い旅行者の目に、ザックにゴミを溢れさせ、汗に汚れた私達の様子は折角のすがすがしい高原気分を台無しにするものだったに違いない。

四度目は、中高年の同僚七氏を案内して、三度目と同じルートに五竜岳往復を加え、それを五泊六日かけてたどる計画で出発した。初日は初めて白馬村八方地区の宿に泊まった。

二日目は頂上直下の白馬山荘だった。この大規模な山荘はフランス料理のフルコースも出せるという噂だ。仲間の半数は高山が初めてだったので、大雪深の登りで疲労し、翌朝の御来迎は見に出られなかった人もいた。

三日目は唐松岳頂上山荘に泊まった。四日目は激しい雨だったので、五竜山荘まで進む予定を自重して山荘で停滞した。

五日目は五竜山荘に荷物を置いて五竜岳(二八一四m)を往復し、遠見尾根から下る予定だったが、そのルートで下山する六人のメンバーとは翌日に大町温泉郷で再会することにして五竜岳で

別れ、健脚の平田俊博さんと二人で五竜岳—八峰キレット—鹿島槍ヶ岳(二八八九m)と足を延ばし、冷池(つべたけ)小屋で泊まった。キレット小屋を出たのは十四時過ぎという強行軍だった。

六日目、私達一人は爺ヶ岳(二六七〇m)を経て種池山荘の前から扇沢(へり、大町温泉郷で全員が合流した。ここで湯に浸かって、そのまま帰阪した。

五度目は、二泊三日の予定で、妻と山仲間の嶋倉完治さん、南賢一さんの四人で恵那山だったか御嶽山だったかを目指して出発したところ、米原が近くなつて、「この日程で白馬鍾温泉へ行けないことはない!」ということになって急遽北陸自動車へ入り、白馬村でキャンプした。

二日目、猿倉から白馬三山の山頂を経て一気に白馬鍾温泉まで歩いた。鍾温泉の小屋へ到着した時は時刻になっていた。小屋には野天温泉があつて、日本最高所(二〇〇〇m位)にあるという温泉だという。日が暮れて天候が下り坂になった。

翌日、雨の中を下った。下山してから八方温泉の露天風呂で汗を流したが、この時分には下界はすっかり晴れていた。暑い中、美味い蕎麦を探し回った。

(以下次号)

遙かなる戦火

内田幸彦

(六) 軍事教練

一九三七年七月、蘆溝橋事件を発端に始まった日中戦争（当時は「支那事変」と呼んだ）は軍部が思った程、簡単ではなかった。

帰還軍人によれば、中国軍は広い国土を巧みに利用し、日本軍が深追いすると退却と見せて逃げ、いつの間にか後に廻り、日本軍はグルリから包圍攻撃されて苦戦を強いられるという。

別の帰還兵によれば、少なくとも日本兵は部屋の中で布団にくるまって寝るが、中国兵は筵一枚に傘と銃、黒パン一個を持っていれば何処でも眠れる人達だから、日本兵は太刀打ちできないという生活習慣の差もあった訳だ。

理由は兎も角、思ったより手こずり、業を煮やした軍部は長期戦に備え、学生にも軍事教練を課した。文字通り、兵隊になるための

基礎訓練である。

学校の軍事教官は尉官と下士官の二人がいて、週二度は油をしばられた。

まず、二列横隊に並び、右から左へ大声で姓名を名乗る。

次は、

「正面に向かって敬礼ッ」

である。背を伸ばし、直立不動の姿勢で敬礼する。挙手の右手の人差し指と、中指の先の間を帽子の縁の付け根に当て、目は正面を見て微動だにさせてはならない。緊張のあまり、息もできぬ程だ。

その日は予備役大尉の一番厳しく怖い教官だった。敬礼は《教練基本の姿勢なり》と記されているように厳正で、目玉を動かしてもいけない。

「正面に向かって敬礼！」

の号令の下に、前列の私は目を見張り、敬礼した。と、その時

「プー」

と低い放屁の音。私は笑いをこらえるのに目を白黒させて耐えた。笑いをこらえるのは、胸が苦しく喻えようもない苦痛だった。もちろん、ここで笑うと往復ビンタが飛んでくる。

三、四人左にいた丁が思わず吹き出した。押さえに押さえた低音が、たまらぬおかしさを招いたので、こらえきれなかったのだ。

血相を変えた教官は足早に丁に近づき、手に持った青い根節（竹の根）が顔に飛んだ。三度、四度ビュンビュンと。恐怖と戦慄でションと静まり返った。

弾力性のある根節はとりわけ痛い。見ている仲間は、見ているだけで身が縮んだ。丁の顔は数条の青アザが交差してフクレ上がり、戦慄に引きつっている。

「何もそこまでしなくても……」
級友達は教官を軽蔑の目で見た。教官は反論するように、

「不謹慎な奴はこうなるぞッ！
解散ッ」

教官の声にも悔悟の念がにじみ出ていた。級友達も不愉快な思いにモノも言わず散って行った。放

屁という生理現象に笑いを止められなかった丁は不運としか言いようがない。

「戦時」はこんな暴力がまかり通る時代なのだ。顔を滅茶苦茶にされた丁は二、三日休んだが、父兄も抗議せず、事件にならず済んでしまった。

現代なら、どうなる？ 父兄やマスコミに叩かれ、教官は退職せねばならないだろう。

恐ろしいのは時代の流れである。良くて悪くても、それで押し通ってしまふことが多い。時代の流れというものには抗しきれない力があるものだ。

ヒカル君の冒険 4

藤川博樹

紙芝居

ヒカル君はまだ三歳なので、お金というのがどういうものかわからない。幼稚園や小学生の大きいお兄さんたちが、よく原っぱにやってくるアイスキャンデー屋さんにか丸いものを渡して、アイスキャンデーを食べているのがうらやましかった。大きい子どもたちが、なんでお金を渡しているのか、渡すとなぜアイスキャンデーをもらえるのか、わからなかった。

ある日、ヒカル君は野原を歩いていて、一円玉をみつけた。小さなア

ルミの金属片で、表面の文字が読めないほど傷だらけで、汚れていた。すり減って変形した一円玉で、誰も見向きもしないものだった。

ヒカル君は、何となくこれがお金であることがわかった。お兄さんたちが、キャンデー屋さんにわたしているお金というものであるだろうと思った。

ヒカル君は、見つけたときあつと思つて、一円玉を拾つてポケットに大事そうに入れた。

翌日、原っぱに紙芝居屋さんが来た。子どもたちが集まってきて、みずあめや、ソースせんべいを買つて食べた。おじさんは、五円玉を受け取ると、一本の割り箸を二本に折つて、水飴の入ったかめのふたを開け、ぐるぐると巻き取つて子どもにわたした。子どもが二本の割り箸を使つて、両手でぐるぐる水飴をこねまわすと、水飴は白くなつた。子どもたちはこの水飴を「スビード」と言つて買つていた。いちばん安くて速くもらえるお菓子だからかな。紙芝居屋さんのほんとうの仕事はお菓子を売ることだった。

紙芝居をやつて子どもたちを集めるのは、お菓子を売るためだったんだ。子どもたちは「鞍馬天狗」なんかをわくわくして見ていたけれど、すぐに鞍馬天狗危機一髪になつて、いったい次回はどうなるだろうというところで終わりになつた。それでも子どもたちはとても満足して、次の週も集まってきた。

だけど、子どもたちはそのうちテレビの「てなもんや三度笠」の方が面白くなつてきて、いつのまにか紙芝居屋さんはこなくなつてしまつた。

子どもたちがわいわいたくさん集まつて、そろそろ紙芝居が始まるかなというとき、ヒカル君がよちよち歩いて紙芝居屋さんに近づいてきた。ヒカル君はどきどきしながら、手のひらに握つていた一円玉を紙芝居屋さんに差し出した。紙芝居のおじさんが、一円玉を受け取つて「なんだ、こりゃ」と言ったら、集まつていた大きい子どもたちが、わつと笑つた。

ヒカル君はとても緊張して、勇気を出してお金を紙芝居屋さんにわ

たしたのだが、なぜだが失敗だったようだ。なぜ失敗だったのかわからなかった。みんなが笑つたので、なぜだかわからない理由で、お菓子ほもらえなかつたということだけはわかつた。

ヒカル君は、うつむいて、とぼとぼあるいてうちに帰つた。

